

農業技術情報

令和8年7月1日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所 015-572-3128
JA幕別町 0155-54-4118
JA札内 56-2131
JA帯広大正 64-4591
日甜幕別原料事務所 54-2756
幕別町農林課 54-6605

★各作物の生育・作業の遅速（幕別町：7月1日現在）（）内は平年値

作物名	遅速日数	生育および作業状況	生育期節
秋まき小麦	早3	稈長 82.2(80.2)cm 穂長 9.3(8.9)cm 穂数 641(683)本/m ²	乳熟期 6/23 (6/26)
馬鈴しょ	早2	茎長 63.6(65.5)cm 茎数 4.0(3.7)本	開花期 6/23 (6/25)
大豆	早2	茎長 25.1(24.0)cm 葉数 4.3(3.9)枚	
小豆	早1	茎長 7.0(6.5)cm 葉数 2.5(2.5)枚	
菜豆（金時）	±0	茎長 19.5(18.9)cm 葉数 2.5(2.9)枚	
てん菜（移植）	早3	草丈 56.4(49.9)cm 葉数 21.0(20.5)枚	
てん菜（直播）	早2	草丈 37.2(35.4)cm 葉数 13.7(13.1)枚	
牧草	早3	草丈 16.2(12.7)cm 1番収穫期 6/17(6/22)	
飼料用とうもろこし	早1	草丈 86.2(84.0)cm 葉数 10.6(10.4)枚	
たまねぎ	早1	草丈 62.1cm(60.2)cm 生葉数 8.1(7.6)枚 葉鞘径 16.6(16.8)mm	

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

畑作

病虫害防除に際しては、薬液がまんべんなく付着するよう作物の成長に合わせ散布水量を増やしてください。

< 秋まき小麦 >

小麦の生育が進んでいますので、これからの防除は使用時期（収穫前日数）を必ず確認した上で行ってください。

1 「赤かび病」の防除

開花期間は日照時間が長く、受粉状態は良好と考えられますが、場合によって臨機防除を検討してください。

表1 赤かび病の防除薬剤（赤さび病にも登録あり）

防除時期	薬剤名	RACコード	使用濃度（倍）	使用時期（収穫前）	回数（以内）
臨機（登熟期間）	チルト乳剤 25	3	1,000~2,000	3日	3回

2 「アブラムシ類」の防除

ほ場を確認し、要防除水準(およそ半分以上の穂に寄生が認められる)を超える場合は6/17付技術情報を参照し、薬剤防除を検討しましょう。

3 収穫作業に向けた準備

- ・コンバインによる収穫作業がスムーズに行えるよう、ほ場周辺の枝払いや草刈りを実施しましょう。
- ・ほ場内に雑草が繁茂している場合、倒伏の助長、他ほ場への種子の持ち込み等が懸念されるため、種草取りを実施しましょう。
- ・過去にソバを作付けたほ場や前作が春まき小麦の場合、収穫物にこれらの子実が異物として混入(コンタミ)する恐れがあるため、収穫前の抜き取りを徹底しましょう。

< てんさい >

1 「褐斑病」の防除

積算気温が高く発病しやすい環境にあるため、引き続き予防的防除に務めてください。

表2 てんさいの褐斑病防除薬剤例

防除時期	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)	水量(10a当)
7月4日 ~6日	フジドーL	M1 (左記のいずれか 1剤)	400	—	—	120ℓ
	ドイツポルドー					
	クプロシールド					
7月16日 ~18日	フセキフロアブル	53	3,000	7日	3回	

病原菌は30℃で7~8日、25℃で9~10日、15℃で19~21日間潜伏し、7~8月の高温多雨により急速に発生が広まります。若い葉は老葉に比べ病原菌の潜伏期間が長く、病斑数も少ないため、下位葉を中心に観察し、予防防除を徹底しましょう。

2 「アブラムシ類」の防除

テンサイ黄化病(西部萎黄病)の被害防止は初期防除が重要なため防除を徹底しましょう。

表3 てんさいのアブラムシ類防除薬剤例

防除時期	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)	水量(10a当)
7月4日 ~6日	ウララDF	29	4,000	14日	2回	120ℓ
	モベントフロアブル	23	2,000	14日	3回	

3 「ヨトウガ」の防除

幼虫が大きくなるにつれて薬剤の効果が低減するため、食害を確認したら速やかに防除しましょう。

表4 てんさいのヨトウガ防除薬剤例

防除時期	農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)	水量(10a当)
7月上中旬	ゲットアウトWDG	3A	3,000	14日	4回	120ℓ

※日甜ハガキ情報や「農作物病害虫防除基準・除草剤使用基準」を参照して適切な防除を実施してください。

4 「根腐病」の防除

高温多湿条件で発生しやすくなります。菌密度が高まっている連作・短期輪作や湿性ほ場で未防除の場合は必ず防除を実施してください(薬剤は 6/17 付技術情報参照)。

< ばれいしょ >

1 「疫病」の防除

疫病は 10℃以上で活動を始め、最適気温 18～20℃の多湿条件で多発します。初発はまだ確認されていませんが、計画的に防除を行いましょう。特に冷涼多湿な環境や水たまりのできやすい排水不良箇所、生育が過繁茂気味のほ場や風通しの悪いところ・山あい・防風林の影響などでは発生しやすく注意が必要です。ほ場をよく観察し基本は予防防除に努めてください。

2 「夏疫病」の防除

夏疫病は多湿と高温乾燥が繰り返されると発生が多くなります。疫病との同時防除で対応しましょう。

3 「菌核病」の防除

落下花卉が葉などに付着し、白色綿状のかびを発生し、そこから腐れが広がっていく病害です。低温多湿条件で発生し、多発すると早期枯凋させて被害をもたらします。発生が確認された場合、疫病との同時防除で対応しましょう。

表5 疫病の防除薬剤例(出典:くみあい農作物病害虫・雑草防除ガイド)

農薬名	RAC コード	使用濃度(倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)	効果の 発現	他対象病害	
						夏疫病	菌核病
フロンサイド SC	29	1,000～2,000	7日	4回	予防	○ 2000倍	○ 1000倍
プロポーズ 顆粒水和剤	40 M5	750～1,000	7日	5回	治療 予防	○ 1000倍	

※「フロンサイドSC」は 1,000 倍で菌核病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する

4 「軟腐病」の防除

高温多湿条件が続くと軟腐病が発生しやすい環境になるため注意しましょう。初期防除の徹底に心がけ、また生育量に応じて散布水量を調節しましょう(薬剤は 6/17 付技術情報参照)。

5 「アブラムシ類」「オオニジュウヤホシテントウ」「ナストビハムシ」の防除

現在、他作物ほ場を含めアブラムシ類の発生がみられています。ナストビハムシもみられています。雑草地や防風林近くでは特に注意し、発生状況に応じて防除を実施してください。

※薬剤防除の使用例は 6/17 付技術情報及び「農作物病害虫防除基準」を参照してください。

< 豆 類 >

1 最終中耕

遅い中耕や培土は、断根による養分吸収阻害の程度が大きくなるので、開花始 10 日前まで(7 月上中旬頃)には最終の中耕・培土を終えましょう。

2 小豆「茎疫病」の防除

連作ほ場や排水の劣る場所で発生することがあります。発病後の茎葉散布では効果が得られないため、今後の気象で大雨など発生が予想される場合は、予防防除や溝切りによる排水の実施を心がけてください(薬剤例は 6/17 号参照)。

3 小豆「チョウ・ガ類」「アブラムシ類」「ハダニ」の防除

ツメクサガは町内で食害が確認されています。食害被害(葉に不定形の穴があく、茎が折れて株がしおれるなど)が拡大する場合は防除を実施しましょう。

マメアブラムシは株に密集して発生する傾向があります。ほ場で寄生が目立ったら、蔓延する前に防除を実施しましょう。

ハダニも一部で確認されています。ほ場を確認し、寄生がみられたら効果のある薬剤で防除します。

表6 豆類の害虫防除薬剤例

薬剤名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	アブラ ムシ類	アズキノ メイガ	ナミハ ダニ	カメ ムシ
モスピランSL液剤	4A	2,000~ 4,000	14日	3回	○	○ 2,000倍		
ウララDF	29	2,000~ 4,000	7日	2回	○			
オルトラン水和剤	1B	1,000	14日	3回	○	○		
スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	4回	○	○	○	○
トクチオン乳剤	1B	1,000	30日	2回		○ (○ツメクサガ)	○	

4 窒素追肥

根粒菌が行う窒素固定量は、豆類の生産性を大きく左右します。大豆>小豆>菜豆の順に根粒菌による窒素固定量が多く、根粒菌の着生量が少ないほど、追肥が必要となります(大豆の場合、開花期頃に10個/個体未満で要追肥)。

生育量や地力、根粒菌の着生状況に応じて追肥の要否を検討しましょう。

表7 豆類の窒素追肥時期と追肥量の目安

作物名	追肥時期	追肥量の目安	備考
大豆	開花期頃	N:2~4 (kg/10a)	生育後期に窒素供給が多いほ場では追肥量を減らす。
小豆	第3本葉展開期前後 (7月上中旬)		
金時	第2本葉展開~開花始頃		葉落ちが悪いほ場、生育後期に多量の窒素が供給されるほ場では追肥量を減らす。

野菜

< なかいも >

1 中耕

6月下旬頃から根が畦間に伸び始めます。遅くなると根を切る可能性があるため、7月上旬までに中耕を終わらせてください。

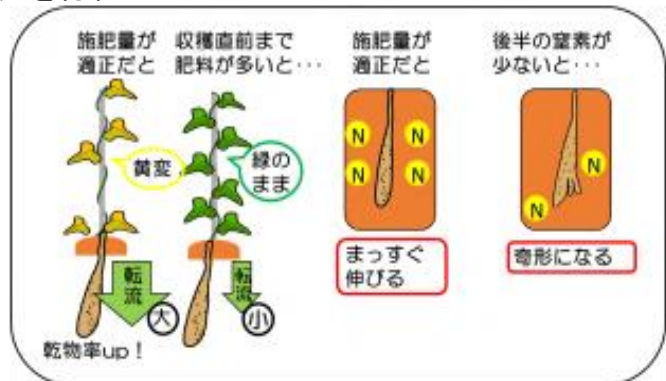
2 トレンチャー耕の陥没対策

集中豪雨に伴う栽培畦の陥没を未然に防ぐため以下の対策を行ってください。

- 培土により、畦間からの雨水の浸入を抑制する
- ほ場外周や雨水が流れ込みやすい場所には溝を掘り、雨水流入を防ぐ
- 陥没が発生した場合は、早期に埋め戻しを行う

3 分肥の施肥時期

- ・分肥を行う場合は、7月中旬まで実施してください。
- ・とちかち太郎は従来品種(音更選抜)より後半の生育が旺盛です。緩効性肥料を使用していない場合は、安定栽培のため分肥を実施してください。
- ・過剰な分肥や多肥ほ場における分肥は黄変期の遅れによる乾物率低下の原因になります。分肥する際は基肥量も確認し、適正範囲内で実施してください。



< たまねぎ >

1 ネギアザミウマ

高温乾燥条件で急激に密度が上昇するので注意してください。ピレスロイド系薬剤(RACコード:3A)への感受性個体が確認されているため薬剤選択に注意してください。

2 白斑葉枯病・軟腐病

白斑葉枯病はまとまった降雨の後7日以内の温暖な日に初発となりやすく、平均気温 18℃以上で発病する可能性が高くなります。また、軟腐病は高温多雨条件で発生が多くなります。

～農薬の安全使用と農作業事故防止に努めましょう～

- ★ 農薬散布において、「農薬安全使用基準」を遵守し散布の高さを適正とし周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★ 散布時は、必ず防除用マスクを身に付け、肌をしっかりと覆うようにしましょう。
- ★ 散布が終わったら、肌の露出部を良く洗い、うがいをしましょう。
- ★ 作業機の連結時の「挟まれ」事故や「機械昇降時の落下」事故に、十分注意しましょう。
- ★ 水分や塩分をしっかりととり、熱中症に注意しましょう。